

住民と協働する健康なまちづくり計画の策定に関する研究

栗田孝子 奥井幸子 会田敬志 小澤和弘 (大学)
泉五十鈴 川瀬友代 苅谷成美 野田千佳 川口寛子 (川島町)
篠田征子 (岐阜地域保健所)

I. はじめに

平成 13 年度に川島町の要望「住民の健康問題を明確にした健康なまちづくり計画を策定したい」に応え、14 年度から共同研究を開始し、健康なまちづくり計画の策定に向けて取り組んだ。

今年度は 2 年目の共同研究で 14 年度実施した「町民の健康に関する意識調査」にフォーカス調査を加え川島町健康づくり計画の策定に取り組んだ。

II. 目的

住民をパートナーとして地域で生活する上での健康問題を明らかにし、住民と共に健康なまちづくり計画を策定する。

III. 2 年間の経過

平成 14 年度：学習会及び調査案検討会・調査の実施、計 19 回

平成 15 年度：計 35 回

- ・「町民の健康に関する意識調査」の分析 7 回 (以下、本調査という)
- ・フォーカス調査案検討 4 回
- ・住民との討論及びフォーカス調査の実施 8 回
- ・健康を考える集いの開催 1 回
- ・本調査報告 町報 1 回
- ・住民との討論及びフォーカス調査まとめ 2 回
- ・計画案策定検討 10 回
- ・保健センター運営協議会での意見聴取
- ・その他 2 回

IV. 川島町の健康に関する実態と計画

川島町の理念・目標 (図 1) に向かって既存資料、本調査、フォーカス調査等の分析を行い、結果を踏まえ計画策定とした。基本目標は「心身ともに健康で生きがいに満ちたまちづくり」で、1.一人ひとりの健康観を育み、健康に対する価値を尊重し高める。2.若い頃から自分の健康を考える。3.自分自身の健康状態を正しく理解し、生活習慣をコントロールとした。その一部を抜粋し報告する。

1. 一人ひとりの健康観を育み、健康に対する価値を尊重し高める。

1) 価値観の実態と目標

・住民の誇りは自然環境 91.2% (合併調査及び本調査)

・住民は暮らしの中で健康であることが最も大切だと考えており (図 2)、その健康とは充実した日々が送れることと考えている。(本調査)

また、家族がそろって元気で普通の生活が送れること、その上、助け合って生きる或いは承認させる中に充実感を持ち、自分のやりたいことに向かう姿を健康の状態と考えている。(フォーカス調査)

・住民の 8 割が健康だと思っている。(本調査)

・健康が気になる人と健康状態は関係性が見られ健康感を高めることは健康観を育むことの見聞となる。(本調査)

目標：「健康だと思う人の割合の維持」

目標値：①健康だと思う人の割合の維持 85%，
②健康を大切に思う人の割合の増加 50 歳未満 35%→45%↑.対応策の詳細は割愛するが、行政の行うことと、個人・家庭・各種団体として自ら行うことと区別して表示した。

図 1 理念と基本目標

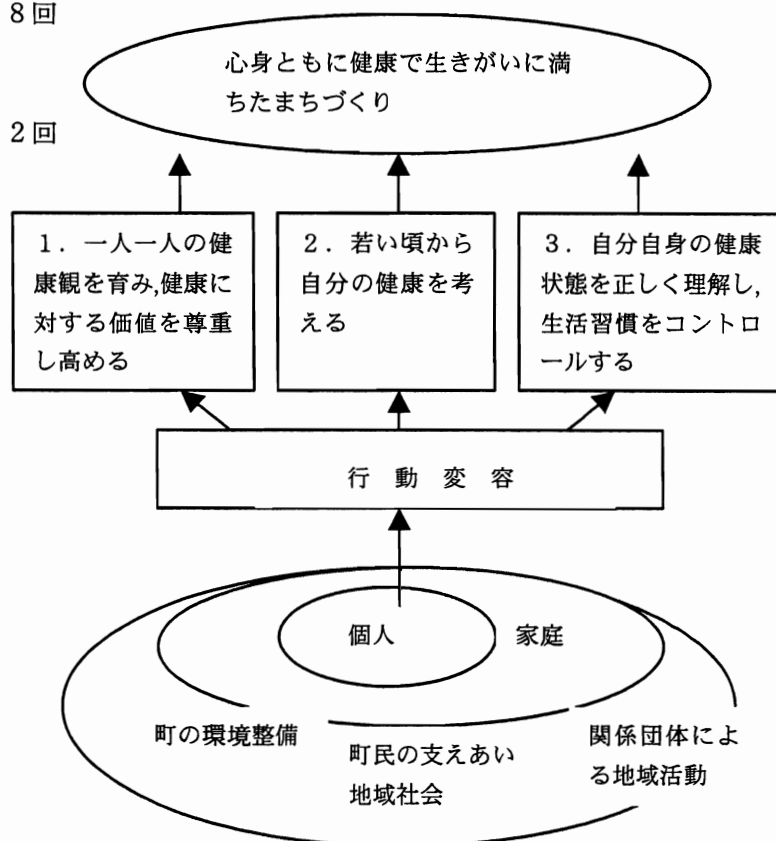
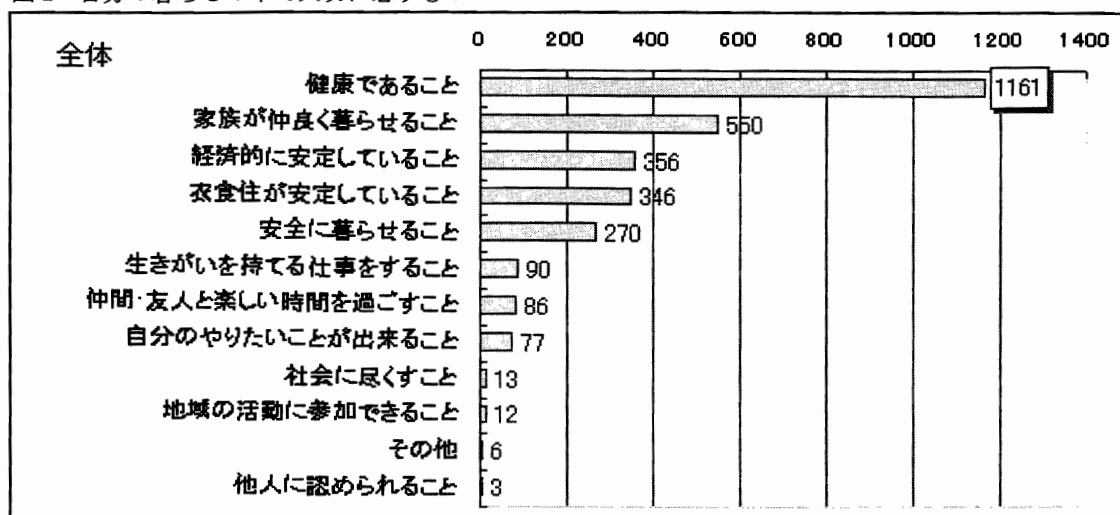


図2 自分の暮らしの中で大切に思うもの



注)「自分の暮らしの中で大切に思うもの」の1位～3位を重みづけした合計

2) 助け合いの実態と目標

- ・人口構成は50歳代が多く、70歳から要介護が増加する。20年後生じる問題として今から支え合う仕組みを考える必要がある。住民も「助け合いができる町」を望んでいる。(既存資料・本調査)
- ・現在の困りごとは2割程度で、5年後には5割の人が困りごとがある。(本調査)
- ・現在の困りごとは経済に係わることが主で、5年後は健康や介護・経済に係ることであった。(図3)。

・70才以上の高齢者の現実的な困りごとは医者通いの交通手段がない、昼間独居の緊急対応であり、この対応が求められている。(フォーカス調査)

・核家族化の進展や他市町村からの転入者の増加は近隣との交流や異世代交流の希薄化を招き支え合いのできる町づくりの課題となる。(既存資料・本調査)

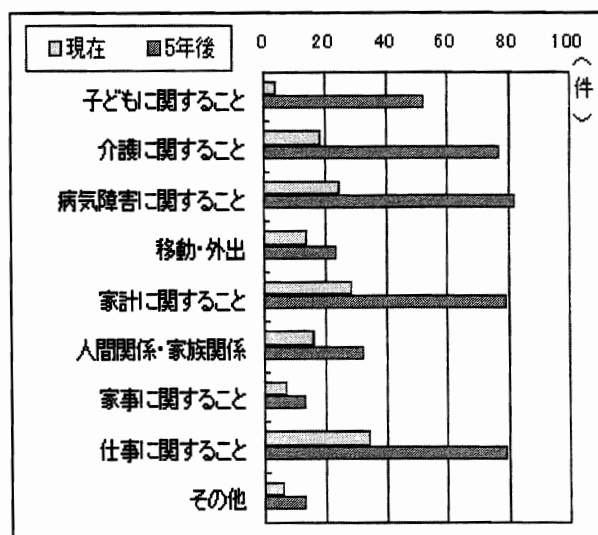
・1年間に手助けしたことある人は約半数、その内容は環境美化、遊び・話相手、おすそ分けであった。(本調査)

・将来に向かい手助けできる人は8～9割いる。
・手助けの内容は入浴の世話や家事の手伝い等は敬遠されている。(本調査)

目標:「町民が地域で助け合いの必要性を理解し、できることから実行する」

目標値:①過去1年間に手助けや協力したことがある人の増加、男性は46.7%、女性は53%をそれぞれ増加する。

図3 現在と5年後の困りごと



2. 若い頃から自分の健康を考える。

1) 若い人達(40才代以下)の健康状況の実態と目標

・若い人達も暮らしの中で大切に思うものは健康であることや家族仲良く暮らすことであったが50歳以上の人に比べ低い。(本調査)

・若い人たちの健康とは充実した日々が送れることと同じように治療中の病気や障害が無いことと考えている。(本調査)

・総死亡に占める50歳未満死亡割合は県に比べ高い。(図4 保健所提示資料)

・疾病別標準化死亡比では県と比べ男では糖尿病、胃がん、脳血管疾患、心疾患、女では子宮がん、胃がん、糖尿病、肺がんが多い(保健所提示資料)

・健康診査は20歳代は7割の受診で、それ以外

の人は8~9割毎年受診している。(図5 本調査)
 ・健康診断結果を生活行動として変化しない若い人は50%以上であった。(本調査)
 ・がん検診はパートや自営業・主婦等の人の受診率が低い。(本調査)

図4 総死亡に占める50歳未満死亡の割合
 (平成11年~13年)

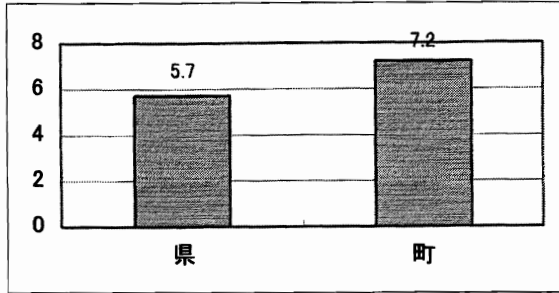


図5 年間の健康診断・人間ドックを受診者

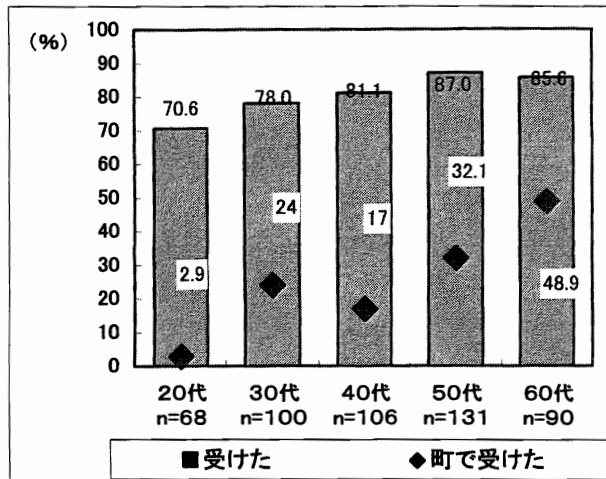
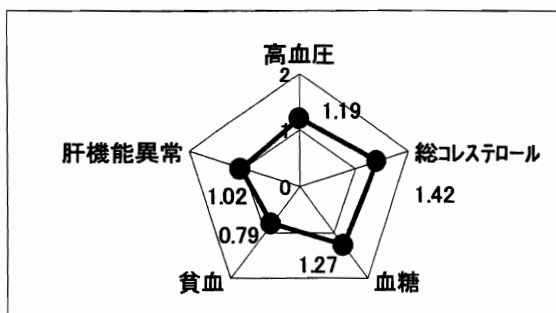


図6 基本健康診査異常項目標準化比(H13)



・住民は健康診査を健康の確認の意味として考えている(図7 フォーカス調査)
 目標:「働き盛りの人の死亡の減少」「健康診断や人間ドックを自分自身の健康管理や生活改善に役立てる」

図7 健康診断や人間ドックの意義(住民の声)

- ・健康の確認
 - 自分の今の状態がわかる
 - 健康管理のために毎年データがほしい
 - 受けないと不安
 - 受ければ安心できる
- ・病気の予防・早期発見
- ・健康増進
 - 生活習慣や食生活に気をつけるようになった

目標値: ①全死亡に占める50歳未満の死亡の割合の半減 7.2%→3.6% ②健康診断受診後, 生活改善できる人の増加 50歳未満男 42.0%→50% 女 67.9%→70% ③町基本検診における高血圧と血糖値の要指導・要医療の割合の減少 ④自営業やパート等の勤め人の胃がん検診受診者の増加 パート勤務者 28.9%→35%↑ 自営業等 32.8%→40%↑ 町実施の胃がん検診受診率の増加 10.3%→12%↑

3. 自分自身の健康状態を正しく理解し, 生活習慣をコントロールする。

1) 食生活の実態と目標

・基本健康診査異常項目標準化比を県と比べると総コレステロール値, 血糖値, 高血圧値が高い。

(図6 保健所資料 本調査)

・3食ともバランスよく食べている人は4割~5割であるが, 30歳代女性は最も低くなっている。目標:「バランスの良い食事を3食食べる人の増加」「家族で楽しく食事をする」「高脂質血症, 糖尿病, 高血圧を予防する食事をする人の増加」

目標値: ①主食, 主菜, 副菜を食食べる人の増加 男 49.4%→50%↑ 女 (30歳代) 18.9%→35%↑ ②朝食を毎日食べる人の増加 20歳代男 54.8%→60%↑ 20歳代女 62.2%→70%↑ ③1日1回は家族そろって楽しく食事する人の割合を維持する。男 87.1% 女 92.6% ④油脂を控える人の割合の増加 20~30歳代男 47.3%→50%↑, 女 70%維持 ⑤塩分を控える人の割合の増加 男 58.2%→70%↑ 女 72.9%→80%↑

2) 運動の実態と目標

・定期的な運動を実施している人は2割~3割であった。(本調査)

・運動をしない理由は時間が無い, 仲間がいない, 場所が無いであった。(本調査)

・暮らしの中でこまめに動くようにしている人は2~3割であった。(本調査)

・車の保有台数が県より高く, 1世帯当2.4台で

あった。(岐阜県統計書)

目標：「暮らしの中でこまめに体を動かす習慣を身につける」「定期的に運動する習慣を身につける」

目標値：①こまめに動くようにしている人の割合の増加 男 19.8%→30%↑ 女 27.3%→40%↑
②定期的に運動する人の割合の増加 男 28.4%→40%↑ 女 33.5%→50%↑ ③車を使わず自転車や歩く人の増加 男 7.8%→15%↑ 女 12.3%→20%↑

3) ストレスの実態と目標

・1月間にストレスを感じたことのある人は6~7割で特に40才代は7~8割で多かった。(本調査)
・自分なりのストレス解消法を持っている人は5~6割で、40才代以下の若い人は解消法を持っている人は少ない。(本調査)

・50歳未満の死亡原因に自殺によるものが見られる。(既存資料)

目標：「上手にストレス解消をする」

目標値：①ストレス解消法を持っている人の割合の増加 男 46.1%↑ 女 57.6%↑

4) 歯

・60歳代になると20本以上の歯の保有者割合が6割程度と少なくなっていた。(本調査)

・歯磨き習慣を見ると夜寝る前に磨く人は5~6割であった。(本調査)

・デンタルフロスや歯間ブラシを利用する人は2割と少ない。(本調査)

・過去1年間に歯科検診を受けた人は4~5割で歯石除去を行った人はほぼ同じ割合であった。(本調査)

・進行した歯周病に罹患している人は5割弱であったが、年齢が高くなるにつれ、その割合は増加し、60歳代では65%、80歳代では80%であった。(町資料)

目標：「正しい歯磨きを習慣づけ、歯の喪失を予防し、何時までも自分の歯で食事をする」

目標値：①60歳で24本歯がある人の増加 男 41.3% 女 50%をそれぞれ60%以上とする。②寝る前に歯磨きする人の増加 男 47.1%→60%、女 64%→70% ③デンタルフロスや歯間ブラシを使う人の増加 男 20% 女 23.1%をそれぞれ40%以上とする。④年1回は歯科検診を受ける人の増加 男 40.3%→50%↑ 女 47.5%→60%↑ ⑤進行した歯周病患者の減少男 47% 女 48.1%をそれぞれ40%以下にする。

5) 肥満の実態と目標

・食の状況では間食を毎日食べる人は男で2割、

女で4割であったが、女の40才代は6割と多かった。また、夜遅い時間にほぼ毎日、夜食を取る人は1割程度であるが男の40才代以下は2割であった。油脂類を控えない人も20~30歳代の男に多い。

・基本検診実施時の問診による食生活状況はおなか一杯食べる人が3割で30歳代では5割を越え、食事の速度の速い30歳代~40才代が多い。

目標：肥満を予防する正しい食習慣や運動習慣を身につける。

目標値：①間食を毎日食べる人の減少。②週4日以上夜遅い夜食を食べる人の減少。③油脂を控える人の増加。④定期的な運動する人の増加。⑤太りすぎの人の減少。

6) アルコール、7) たばこについても同様に目標及び目標値を設定した。

V. 計画策定を振り返って(考え方)

川島町は16年11月に人口135,000人の市へ合併することが決定されている。

計画策定の動機は保健活動を一生懸命行ってきたが各指標が改善されず、根拠ある活動をしたいという願いであった。共同研究を取り組む中で合併時期が決まり、何故この時期にと言う思いと人口10,000人の住民の思いを今後の合併に向けて生かしたいという願いが加わり計画づくりに取り組んだ。このような背景の中、「目標値」や「取り組み」については合併を視野に行動計画として現実的に実行可能な事柄を重視した。

また、今までの保健活動は行政主導で実施してきており、住民の主体性を育んできたのか、という反省に立ち、住民自身が自ら考え、選択できるような活動へ変換することを念頭に行政の行うことと住民一人ひとりで、家族で、或は地域で取り組むことを考えた計画とした。

今後は本計画がその主旨に沿って住民と共に実行するため様々な団体や教育委員等と学習会や討論会を重ねる中で実行していきたい。

VI. おわりに「共同研究を行って」

3者が対等の立場で各々の役割を担い討論する中で相互の役割や協働は深まり、学びを深めた。学生も参加する機会を得て現地での真摯な討論は学生に刺激を与えたようである。また、川島町で14年度の実施した「町民の健康に関する意識調査」は15年度の情報演習の教材として活用している。共同研究は現地専門職の質の向上に繋がると共に大学教育の充実にも役立ち両者にとつ

での意義を理解する大きな機会であった。

[共同研究報告と討論の会での討論内容]

第2分科会では3題が市町村の保健福祉活動に関するもので、市町村合併が進行する中で住民ニーズを大切にしながら今までの保健活動をどのように継続発展させるかが大きな課題であるという認識に立ち、3グループの発表に興味関心のある人たちが20名程集まり討論がおこなわれた。

1) 市町村合併を控えて大切にしてきた活動をどのように維持するか

それぞれの取り組みについて

郡上市：7か町村の対等合併であり、殆どの町村にそのまま保健師は残り活動する。高鷲村の保健師1名が八幡の本庁、健康管理課に配属される。7か町村では今までの保健活動はそのまま残るものが多く削減されるものは乳児検診を3回実施していたが中間の6.7ヶ月検診をやめることにした。また乳児の医療券も5枚も出していた村があったが、3枚になったことが削減されたことであり、若妻会は他地域から嫁に来た人達の訴えから開始した事業で、仲間づくりとして今後も広げていこうと話している。このように保健活動を充実させていこうと言う考えで43回もの話し合いを持って事業のすりあわせ等を行ってきた。

課題は福祉及び教育委員会等との連携で今まで出来ていない町村があり、これからどう進めるか検討していきたい。

質問：規模が小さかったから住民が良く見えた。しかし市となって住民が見えるのだろうか？

川島町：16年11月に各務原市へ合併することになっている。(135,000人の人口に対し10,000人の川島町住民が加わる)今までの川島町の取り組みは行政として住民を引っ張ってきたきらいがある。「住民自身が自らをつくっていく。健康をつくっていくために行政として何をすべきなのか。どうゆう方向で何をしていくことが住民の支援になるのか。健康づくりが聖域でなく、リストラもあると思う。理念のすりあわせがなく、事業のすりあわせを行っているが、今回の計画で理念や住民の思いが明確になったので、この現状を訴えていきたい。

羽島市：岐阜市との対等合併であるが、合併する市町の人口はバラバラで事業のすりあわせを行っているが、人材や財政的理由で簡単に切ろうとする。本当にそれでよいのか、「健康日本21」をもとに話し合いたい。「健康」が行政の最大の課題に

ならないので住民の力で勝ち取っていかねばならないし、譲れない思いを大切にしていきたい。

関市：関市は小規模町村を吸収する立場にある。保健サービスは関市に合わせているようで、小規模の町村はサービスが下がってきているのでないだろうか。

白川町：加茂郡7か町村が美濃加茂市に吸収されることになる。17年2月頃の合併を目指し、合併協議会が立ち上がった。今は、管理者の話し合いがもたれているが、何故そうなったか住民に説明できるように分科会として話し合い、地域活動を大切にしていきたい。

2) 県保健所の関わり・期待

川島町：今回の計画づくりの資料は岐阜地域保健所が出してくれた。また、合併にむけて「健康づくり計画」の大切さを各務原市に保健所長が働きかけていると聞いている。このように保健所は重要なパートナーであった。県のビジョンとしてどうしてほしいかを提案して下さることを期待している。

郡上市：郡上センターは合併協議会には入っていない。事業として「親子健やか教室」や「精神保健活動」については内容を高めるような話し合いを持った。県の福祉事務所は無くなる。

3) 小・中学生の生活習慣病予防の取り組みについて合併後にどのようにするのか

郡上市：小学校(保育園も含む)と地域の連携を進めたい。養護教諭の先生と仲良くなれば、学校にも様々な問題がある(生活習慣病だけでなく性問題、酒、タバコなど)また、学校は親への助言はしにくいようで、地域の保健師に期待されている。

4) 大学への期待

大学が入って何かしていると言うだけでも保健師のイメージアップに繋がる。また、住民に対して、市の保健師が話すより大学の先生が話す住民の関心も高くなると思うので今後も大学支援してもらいたい。等活発な意見交換がされた。

この討論に参加して、この合併は保健活動の転換期にあると認識した。住民の健康を守る責任を担う専門職としてどのようにその責務を果たすのか、を問われているということを参加者のそれぞれが強く感じた討論であった。